KYRIBA CASE STUDY

Color & Comfort

DIC株式会社

財務戦略強化のためにクラウド型財務管理ソリューションを選択

世界トップシェアのインキ、有機顔料のほか、合成樹脂、電子向け材料などを手がけるDICは、海外企業の買収などに伴い、資金効率の向上とリスク管理の強化が課題になっていた。その解決のために、同社が選んだのが、クラウド型財務管理ソリューション「キリバ・エンタープライズ」だ。

クラウド型財務管理システム導入目的と効果

目的：財務体質強化のため、グローバルベースでの資金効率向上と海外比率上昇に伴う各種リスクへの対応

①資金の可視化	②資金予測の自動化	③リスク管理
・SWIFT接続により、主要口座の約80％可視化を実現 ・表計算ソフトからの脱却	・ERPと接続したグループ資金予測の自動化に着手し、グローバルベースでのグループ流動性管理を目指す	・「DIC108」基本戦略ー3年間で1500億円の戦略的投資を実行するため、本社主導のガバナンスを実現

スピードと将来変化にクラウドで対応

DIC 株式会社
財務部長
古田 修司氏

DIC 株式会社
財務部グローバル資金管理
担当部長
堺 公紀氏

DIC（ディーアイシー、旧大日本インキ化学工業）は、1908年、印刷インキの製造と販売で創業した。以後、その基礎素材である有機顔料、合成樹脂の技術をベースに、幅広い製品を提供している。

海外進出の歴史も古く、1919年には中国に進出、現在、世界64の国と地域に174のグループ会社（うち、海外143社※2015年12月末時点）を通じて事業を展開している。海外売上高比率は約60%に達しているという。DICのグローバル展開において、大きな転機の一つが、米国大手化学メーカー、サンケミカルのグラフィックアーツ材料（インキ、顔料など）部門の買収成功であり、その後も積極的なM＆Aにより海外事業の拡大を図ってきた。

「当社にとって大きな財務課題の一つが、グループの資金効率向上による財務体質強化でした。また、海外事業比率の上昇により、為替管理など様々なリスク対応も行う必要がありました」とDIC財務部長の古田修司氏は語る。古田氏によれば、以前は資金管理を表計算ソフトのスプレッドシートを使い手作業で行っていたという。財務部グローバル資金管理担当部長の堺公紀氏は「さらに、これらも残高がわかるのは月末時点のものだけで、月中にお金がどう動いているのか、本社から知ることができませんでした」と振り返る。

古田氏は「資金効率向上のため余剰資金の圧縮を目的としたキャッシュプーリング（資金の自動的な集約・分配）などを活用していましたが、効率的な運用には資金の可視化を行う必要がありました」と語る。

kyriba

口座の預金情報の把握を行うにはいくつかの方法がある。古田氏は次のように話す。「これまでは、ERP（統合基幹業務システム）から毎月、会社ごとの預金残高を取得していましたが、それでは速報性がありません。銀行の端末から残高を取得することもできますが、口座数が多く煩雑です。そこで、 ERPと直接接続したスタンドアローン型のTMS（財務管理システム）導入も検討しましたが、その実現は容易ではありませんでした」。

大きな阻害要因はコストと時間だった。170社を超えるグループ会社すべてにスタンドアローン型のTMSを導入しようとすれば億円規模の費用と、かなりの導入期間が必要だと思われた。「経営環境が刻々と変化している中で、スピードで劣るだけでなく、将来の変化にも対応できません」（古田氏）。

そこで同社が選んだのが、キリバが提供するグローバル財務管理システム「キリバ・エンタープライズ」だ。米国をはじめ世界1300社で導入実績があるほか、日本でも大手グローバル企業に採用されている。「キリバ・エンタープライズ」の大きな特長は、クラウドにより提供されることだ。インターネットに接続できればどこでも利用でき、拠点や子会社の増加、その他機能の追加などへの対応も簡単に行うことができる。スタンドアローン型TMSを導入するのに比べれば、コストは大幅に安く、導入プロセスも容易だ。

堺氏は「2015年の12月に契約をして、16年の4月には第1フェーズが完成しました。そこでのスピード感と中身の品質を見て、早期に第2フェーズに進めると確信しました」と話す。

左から　情報システム本部 中西功介氏、
財務部　曽根清佳氏、阿部幹子氏、小林与志孝氏

DIC株式会社

会社概要

- **本社：** 〒103-8233 東京都中央区日本橋三丁目7番20号ディーアイシービル
- **代表者：** 代表取締役 社長執行役員　中西 義之
- **設立年月日：** 1937年3月15日（昭和12年）
- **資本金：** 966億円
- **事業内容：** 印刷インキ、有機顔料、合成樹脂等の製造・販売

資金の可視化を実現し、子会社からのレポート集計業務の自動化を開始

DICではまず、第1フェーズとして、銀行口座の見える化に着手した。SWIFT（国際銀行間通信協会）を利用し、「キリバ・エンタープライズ」に異なる銀行の主要口座の情報を集約したのである。これにより、これらの間でのプーリングが可能になるとともに、主要決済口座の80%について、資金の可視化に目処が立った。「第2フェーズでは、グローバルベースでの資金予測の自動化を行っていきたいと考えています」と堺氏は話す。

銀行口座の可視化により、現在の資金の状況は把握できるが、明日、来週、来月の資金繰りといった資金予測はできない。同社ではグループ企業のERPと「キリバ・エンタープライズ」を連携させることにより、売掛金・買掛金、借入金などの債権・債務のデータを取り込み、資金予測の自動化に着手する。まさに、グローバルベースでのグループ流動性管理を目指しているわけだ。

「キリバ・エンタープライズ」の導入により、早くも具体的な成果が生まれているという。「これまでのキャッシュプーリングの管理は、銀行の端末から数字を転記、又は各社から送られてくるスプレッドシートを手作業でまとめていましたが、それが不要になりました。『キリバ』は、スタッフの説明も丁寧でサポートも手厚く助かりました。これまで、スケジュール通りに導入できており、今後のフェーズも早期に実現できると考えています」（堺氏）。

古田氏はさらに、「キリバ・エンタープライズ」を活用した、ガバナンスの強化を視野に入れている。「当社は2016年2月、今後3年間の中期経営計画『DIC 108』を発表しました。ここでは、基本戦略の一つとして、3年間で1500億円の戦略的投資（M＆Aなど）を掲げています。グローバルベースでの財務管理もますます重要になります。『キリバ』の活用により、本社主導のガバナンスも実現すると大いに期待しています」。

『週刊東洋経済』2016年12月17日号に掲載

kyriba®

キリバ・ジャパン株式会社
〒107-6218 東京都港区赤坂9-7-1ミッドタウンタワー 18F
www.kyriba.jp/ | info-jp@kyriba.com | 03-4590-6618